

逸話を通して見る音の世界—大切な楽器の修理—

天理大学国際学部教授

中 純子 Junko Naka

名器にはしばしば名が付けられる。本邦には藤原貞敏（807～867）が唐の廉承武から与えられた琵琶に「玄象」や「青山」と名づけられた品があった。「玄象」「牧馬」「獅子丸」などの名を持つ楽器の説話が集められた『名器秘抄』（南北朝期の編纂）という書もある。中原香苗氏によると、「音楽説話のうち、楽器名物に関するものは、かなり組織的な形で『江談抄』にみられる。……楽器名物譚は、音楽説話の中でも特に人々の関心を集めていたものと想像される」（『宮内庁書陵部蔵『名器秘抄』考』『論集 説話と説話集』2001年、和泉書院所収）とある。『江談抄』とは平安後期の説話集で、珍重される楽器に名が付けられることは、我が国では当然のことだったようである。中国でも、古代から特別な七絃琴に「璵璠之乐」と銘として刻まれたり、「鳳凰」と名が付けられた話は漢代の『西京雜記』（『太平広記』巻203所収）にみられる。では、藤原貞敏が訪れた唐代において、特別な楽器に名が付けられた逸話をみてみよう。

命名された楽器

唐代の逸話を集めて宋代に編まれた錢易『南部新書』巻9に、「忽雷」と命名された琵琶について以下の記述がある。

韓晉公が朝廷に勤めていたおり、使命を受けて蜀に行くことになり、長安の西南の駱谷に到ると、山椒の巨木が美しく生い茂り、鳥や鳥の鳴き声もみな他とは異なっていた。馬からおりて、柘の弓で射ようとすると、てっぺんの梢が落下して、山間に響き、それは鐘や磬のような音色があった。任務を終えて都へ戻る折に県の役人に命じて樵を募ってこれを伐採させ、その幹を取って馬に載せて都に戻った。そして良匠を召してこれを切らせたが、その名は分らなかった。堅くてきめが細かいことは紫石のようであり、金色の線がその間に雑じっていた。匠は琵琶の胴に使えば、他の木で作るものとは比べものにならない仕上がりとなるでしょう、と言った。そこで二張りの琵琶ができた。大きいほうを大忽雷、小さいほうを小忽雷といった。別殿で徳宗が音楽について語られることがあり、それで大忽雷を献上し、宮中に所蔵された。小忽雷は親仁里にある。（韓晉公在朝、奉使入蜀、至駱谷、山椒巨樹聳茂可愛、鳥鳥之声皆異。下馬以柘弓射其巔杪、柯墜於下、響震山谷、有金石之韻。使還戒縣尹募樵夫伐之、取其幹載以歸。召良匠斲之、亦不知其名、堅緻如紫石、有金色綫交結其間。匠曰為胡琴槽、他木不可並。遂為二琴。名大者曰大忽雷、小者曰小忽雷。因便殿德皇言樂、遂獻大忽雷、為禁中所有。小忽雷在親仁里）

「大忽雷」「小忽雷」の琵琶を作った韓晉公（韓滉）は、代宗から徳宗（779～805）にいたる時期の人である（『歴代名画記』巻10参照）。最後に徳皇とあるのは、徳宗である。前回紹介した康崑崙と段善本の琵琶の勝負をさせたのも徳宗であった。徳宗の時代は、玄宗の側近だった宋璟の孫の宋沆が『樂書』三巻を献上したり、節度使から「南詔奉聖樂」など楽曲の献上が相次いで行われたりした。音楽を政治的にも活用し、音楽によるパフォーマンスの重要性を理解していた皇帝であるといえよう。「大忽雷」は、この徳宗に献上されたものであった。そして、その命名は、山椒の巨木の梢がてっぺんから落ちてきた音が、山間に響いたためであろうか。また、「小忽雷」のほうも、その後、宮中で使われていったことが以下の逸話にみられる。

宮中楽器の修理

こうした名器は修理を繰り返して微調整されることにより良い音を保つものである。宮廷音楽機関の太常寺や宴饗音楽を掌る教坊に技術をもった楽人たちが集まっていた長安では、崇仁坊という宮城の近くの区画に楽器修理工場が集まっていた。以下のような逸話が、晩唐の段安節の『楽府雜錄』「琵琶」の条にある。

文宗朝に、女官に鄭中丞というものが出て、琵琶が上手であった。内庫には、琵琶が二張りあり、それぞれ大忽雷、小忽雷と呼ばれていた。鄭中丞はいつも小忽雷を弾いていたが、頸部が抜けてしまったので、崇仁坊の南の趙家に琵琶を送って修理させた。だいたい、楽器職人はすべてこの崇仁坊におり、なかでも二趙家は一番優れていた。（文宗朝、有内人鄭中丞、善胡琴。内庫有二琵琶、号大・小忽雷。鄭嘗彈小忽雷、偶以匙頭脱、送崇仁坊南趙家修理。大約造樂器悉在此坊、其中二趙家最妙）

文宗の御代は826年から840年までの間である。藤原貞敏が、遣唐使准判官となり唐へ渡ったのが838年（日本：承和5年）であり、当時中国では楽器制作の技術水準がかなり高く、一張り一張りの楽器に個々の性格や謂われがあり、特別な装飾が施されていたりしたのであろう。

ちなみに、この『楽府雜錄』の琵琶の条では、「内人鄭中丞善胡琴」という言葉がみえる。そのあとすぐに「内庫有二琵琶、号大・小忽雷」とあることから、「琵琶」が「胡琴」とも称されていたことが確かめられる。またこれは宋初に編まれた百科事典的な書物『太平御覽』巻583楽部の「琵琶」にもみえる。「胡琴」の名称は、中唐以降に定着していったといえる。

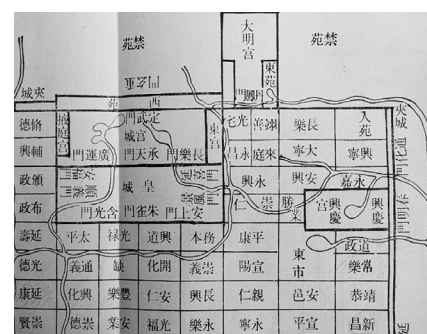
さて、「大忽雷」が献上されたのは徳宗の御代であり、徳宗から文宗の間、短くても20年の間、宮中にて「小忽雷」もともに使われていたことは確かであり、頸部が脱けてしまったため崇仁坊の修理場へ預けられた。しかも腕のいい修理工である南の「趙家」のところであった。

楽器制作・修理の崇仁坊

徐松『唐兩京城坊攷』

（愛宕元訳注 平凡社東洋文庫）の図（右）

では、大明宮の南の第四区画に「崇仁」とみえる。ここは皇城にも近く、朱雀門付近に位置する宮廷音楽機関太常寺からも近い。また、



興慶宮にも近い。つまり、宮中音楽を演奏する場からの距離が近く、楽器の修理場として好立地といえよう。さらに『唐兩京城坊攷』には、「崇仁坊」の条に、玄宗の娘の太華公主、徳宗の娘の義陽公主の邸宅があったことが記載されている。こうした邸宅では華やかな宴会が行われたことであろう。また、ここには韓晉公の邸宅もあったとのこと。「大忽雷」「小忽雷」を作らせた本人もここに住んでいたのである。さらには、長安の妓女が集められていたのは、崇仁坊のすぐ南の「平康坊」であった。楽器の制作や修理は、宮廷も民間も同じ坊で行われた。崇仁坊は宮廷音楽と民間音楽が交差する場所でもあったのだ。